

二王門

堂々たる威容を示す二王門は仁和寺の入り口である。仁和寺そのものの歴史は9世紀にまで遡るが、この二王門は、応仁の乱（1467～1477年）で寺の大部分が焼失したことを受けて行われた大規模な再建事業の際に建てられたものである。長い歴史の間に広範囲にわたる修理や保存修復の工事が行われてきたものの、二王門は建立以来、常に来訪者を迎え入れ続けている。

人々はこの二王門の壮大な姿に敬意を表して、知恩院、南禅寺の門と並ぶ「京都三大門」のひとつとして崇めている。二王門は、信徒を寺に迎え入れるだけでなく、悪霊や盗賊、仏敵を退散させるという役割をも担っている。その役割を果たすのが、門の左右両側に立つ吽形と阿形の守護神「二王」である。険しい表情をした、筋骨隆々のこの2人の守護神の像は、多くの仏教寺院の門に設置されている。互いに似通った外見をしているものの、この2体を見分けるのは簡単だ。阿形は口を開いており、吽形は口を閉じている。阿形の口からは「あ」という叫び声が聞こえてくるようだし、吽形は「ん」と唸り声をあげているように見える。